

こども科学研究費補助金（成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業）

総合研究報告書

低年齢児保育が子どもの発達等に及ぼす効果・影響の解明のための研究

令和6年度 分担研究報告書

「低年齢児保育に関する保育者の認識―安全に着目して―」

研究分担者 猪熊弘子 駒沢女子短期大学 教授

研究分担者 峰友紗 武蔵野大学 准教授

研究要旨

保育施設における死亡事故は低年齢児に集中している。本研究では低年齢児を担当する保育者が「安全」についてどのように認識しているかを明らかにした。保育者の90.1%が「睡眠中、プール活動・水遊び中、食事中などの場面で重大事故が発生しやすい」ことを認識しており、『保育所保育指針』等の事故予防に関する項目が浸透していると考えられる。一方で児童虐待が疑われる子どもへの対応やアレルギー対応への理解は比較的低い傾向が見られた。また睡眠中の安全に関しては「うつ伏せになった子どもをすぐに仰向けに直している」割合は半数以下（48.4%）に留まっており、睡眠中の死亡事故が多い低年齢児保育においては大きな課題である。

A. 研究目的

全国的に急激な少子化が進んでいる。こども家庭庁の調査(2024a)によれば、2024年4月時点で保育所等を利用する児童の数は2,705,058人であり、前年と比べて12,277人(0.5%)も減少している。ほかにも施設数、利用定員、定員充足率などが軒並み前年比減となっており、少子化の影響が保育施設にも現れている中で、唯一増えているのが1,2歳児の保育所等利用率である。2023年4月には960,598人であった利用者が2024年4月には964,302人と3,704人も増加している。これは1,2歳児の児童数が2023年4月には1,707,000人だったところから2025年4月には1,625,000人と82,000人も減少している中で注目し得る数字である。子どもの数は減っているに関わらず、1,2歳の低年齢児保育は増え続けているのである。一方で、保育施設における死亡事故は低年

齢児に集中している。こども家庭庁(2025b)によれば、2023年1月1日から同年12月31日までの期間内に国に報告があった就学前の保育施設における重大事故のうち、死亡事故は全部で6件報告されており、0歳4件、1歳・2歳がそれぞれ1件ずつとすべて低年齢児が占めている。少子化の影響が顕著に表れているにも関わらず、特に死亡事故が起こりやすい低年齢児の保育需要が増え続けていることを考えると、低年齢児の保育の質保障とは第一義的に子どもの安全を守ることと言えるのではないだろうか。同様の先行研究である三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社の調査(2024)では、「低年齢児の健康及び安全の管理について」の質問があるが、「午睡の事故防止のために行っている工夫」「安全管理」「保健・健康管理」(pp. 55-58)の項目にとどまっており、『保育所保育指針』および『保育所北指針解説』に沿うような細かな安全に

についての質問がないことから、より具体的な安全に関する状況を知ることが必要であると考えた。

そこで本研究は、全国の保育所・認定こども園において0・1・2歳の低年齢児の保育を担当している保育者（保育士・保育教諭）に対するアンケート調査を通し、日本における低年齢児の保育実践の質を探索する中で、特に低年齢児の保育において必要な「安全」について、保育者がどのように認識し、保育を行っているのかについて着目して分析することにより、低年齢児の保育の質的保障について考察を深めることを目的とするものである。

B. 研究方法

全国の保育所・認定こども園のうち、0・1・2歳の低年齢児の保育を実施している施設について、都道府県、施設種、施設設置別がランダムになるよう無作為抽出し、5000施設を調査対象施設として選択し、施設長および低年齢児の保育を担当している保育者（保育士・保育教諭に限定）を対象としたアンケート調査票を送付、回収した（実施期間2024年2月～5月）

設問は、『保育所保育指針』および『保育所保育指針解説』を元に作成し、特に「安全」に関する項目については表-1に示した18の設問を設けた。

表-1 低年齢児を担当する保育者に対する「安全」に関する質問一覧

1	登園時、保護者から家庭での子どもの様子や情報を聞き取っている。
2	保育中、子どもの健康状態を細かく観察している。
3	子どもの体温や排泄などに関する健康状態に関する情報を、1日の中で数回把握し記録している。
4	子どもの様子がいつもと異なると感じた時には、職員間で連携し、すばやく対応している。
5	午睡中の呼吸チェックを行なっている。
6	うつ伏せになった子どもをすぐに仰向けに直している。
7	子どものけがや体調不良時の基本的な対応や手順が明確になっているマニュアルの内容を理解している。
8	虐待などの不適切な養育が疑われる子どもへの基本的な対応や手順が明確になっているマニュアルの内容を理解している。
9	虐待などの不適切な養育が疑われる子どもがいた場合、園長や主任、他の担任に報告・相談し、速やかに対応するように努めている。
10	健康診断の結果から、受診等が必要と思われる子供には、保護者へ声をかけている。
11	保育中のけがやヒヤリハット、事故予防について職員間で共有するよう努めている。
12	睡眠中、プール遊び・水遊び、食事中等の場面で重大事故が発生しやすいことを知っている。
13	『保育所におけるアレルギーガイドライン』について内容を理解している。
14	エビペンの使用方法について理解している。
15	クラスで流行している感染症に関して注意を向けている。
16	おむつ交換後には、必ず手洗いをしている。
17	日常的におむつ交換の場所を消毒し、適切な消毒薬を知っている。
18	おむつ交換の手順は決まっている。

また、アンケート対象者については他に、性別・担当クラス（こどもの年齢等）・業務経験・資格や免許の種別と取得方法についても質問しており、クロス集計や分析によりその属性と傾向の関係性が分かるように設定した。

<倫理的配慮>

日本保育学会倫理綱領に基づき、回答にあたって園や個人が特定されないこと、学会等で報告すること等を調査票の表紙に記載し同意を得た上で調査を実施した。本研究は武蔵野大学教育学部倫理委員会の承認を受けている（承認番号 R6-002）。

C. 研究結果

998園（返送率20.0%）から2,800名の返送があり、安全に関する18項目すべてのデータが得られた2,527名分のデータを分析対象とした。

①基本属性

基本属性は、表-2に示す通りである。回答者の年齢は、20代が多く、続いて30代が多かった。回答者の勤務形態については正規職員が全体の85%以上を占めていた。担当クラスについては、0歳児28.1%、1歳児28.3%、2歳児29.9%であり、全体の約1割が混合クラスであった。経験年数については、10から20年が最も多く、ついで5年から10年、20年以上だった。

前記の安全に関する質問に対する回答の結果をまとめたものが表-3である。

②安全に関する質問とその回答

「とてもあてはまる」という回答が最も多かったのは、質問12「睡眠中、プール活動・水遊び中、食事中等の場面で重大事故が発生しやすいことを知っている」で90.1%(2277名)であり、「あまりあてはまらない／全くあてはまらない」はわずか0.1%(3名)であった。ついで、質問15「クラスで流行している感染症に関して注意を向けている」が83.1%(2100

名), 質問 4「子どもの様子がいつもと異なると感じた時には職員間で連携し, すばやく対応している」が 81. 2%(2054 名), 質問 5「午睡中の呼吸チェックを行なっている」と質問 16「日常적으로むつ交換の場所を消毒し, 適切な消毒薬を知っている」が 78. 9%(1994 名)であった。

表-2 対象者の基本属性

年齢(歳)	n	%
-29	694	27.7
30-39	684	27.3
40-49	630	25.2
50-59	388	15.5
60-	109	4.4
性別		
女性	2464	97.7
勤務状況		
正規	2225	88.6
正規以外		
担当クラス		
0 歳児	711	28.1
1 歳児	716	28.3
2 歳児	756	29.9
0/1/2 歳児	128	5.1
0/1 歳児	97	3.8
1/2 歳児	73	2.9
経験年数 (年)		
0-3	225	9.0
3-5	230	9.2
5-10	584	23.3
10-20	889	35.4
20-	581	23.2
低年齢児保育経験		
0-3	327	18.8
3-5	519	21.2
5-10	824	33.6
10-20	562	22.9
20-	87	3.6

逆に「とてもあてはまる」が最も少なかったのは, 質問 8「虐待などの不適切な養育が疑われる子どもへの基本的な対応や手順が明確になっているマニュアルの内容を理解している」で 25. 6%(648 名)。この質問については「虐待などの不適切な養育が疑われる子どもへの基本的な対応や手順が明確になっているマニュアル」の有無についても質問しているが, 13. 8% (348 名) は園にマニュアル自体がないと答えている。

また, 質問 14「エピペンの使用方法について理解している」は 40. 5%(1024 名), 質問 13『『保育所におけるアレルギーガイドライン』について内容を理解している』は 41. 6% (1050 名) であり, アレルギーへの対応につ

いて十分でないと感じている保育者が比較的多い。特に質問 14 については「あまりあてはまらない／全くあてはまらない」と答えた人が 20. 4%(516 名)おり, エピペンの使用方法を理解していない保育者が 2 割を超えることがわかった。

表-3 低年齢児を担当する保育者に対する「安全」に関する質問および結果 (N=2527)

	とてもあてはまる	あてはまる	あまり／全くあてはまらない	マニュアルなし*
1 登園時、保護者から家庭での子どもの様子や情報を聞き取っている。	1486 (58.8)	1006 (39.8)	35 (1.4)	
2 保育中、子どもの健康状態を細かく観察している。	1508 (59.7)	1008 (39.9)	11 (0.4)	
3 子どもの体温や排泄などに関する健康状態に関する情報を、1 日の中で数回把握し記録している。	1518 (60.1)	827 (32.7)	182 (7.2)	
4 子どもの様子がいつもと異なると感じた時には、職員間で連携し、すばやく対応している。	2054 (81.2)	466 (18.4)	7 (0.3)	
5 午睡中の呼吸チェックを行なっている。	1994 (78.9)	479 (18.4)	54 (2.1)	
6 うつ伏せになった子どもをすぐに仰向けに直している。	1214 (48.4)	1122 (44.4)	175 (6.9)	
7 子どものけがや体調不良時の基本的な対応や手順が明確になっているマニュアルの内容を理解している。	919 (36.4)	1331 (52.7)	127 (5.0)	150 (5.9)
8 虐待などの不適切な養育が疑われる子どもへの基本的な対応や手順が明確になっているマニュアルの内容を理解している。	648 (25.6)	1202 (47.6)	329 (13.0)	348 (13.8)
9 虐待などの不適切な養育が疑われる子どもがいた場合、園長や主任、他の担任に報告・相談し、速やかに対応するように努めている。	1743 (69.0)	745 (29.5)	39 (1.6)	
10 健康診断の結果から、受診等が必要と思われる子供には、保護者へ声をかけている。	1873 (74.1)	600 (23.7)	54 (2.2)	
11 保育中のけがやヒヤリハット、事故予防について職員間で共有するよう努めている。	1886 (73.8)	613 (24.3)	48 (1.9)	
12 園庭中、プール遊び・水遊び、食事中等の場面で重大事故が発生しやすいことを知っている。	2277 (90.1)	247 (9.8)	3 (0.1)	
13 「保育所におけるアレルギーガイドライン」について内容を理解している。	1050 (41.6)	1186 (46.9)	291 (11.6)	
14 エピペンの使用方法について理解している。	1024 (40.5)	987 (39.1)	516 (20.4)	
15 クラスで流行している感染症に関して注意を向けている。	2100 (83.1)	424 (16.8)	0 (0.1)	
16 おむつ交換時には、必ず手洗いをしている。	1994 (78.9)	468 (18.5)	59 (2.3)	
17 日常のおむつ交換の場所を消毒し、適切な消毒薬を知っている。	1674 (66.2)	686 (27.2)	167 (6.7)	
18 おむつ交換の手順は決まっている。	1679 (66.4)	707 (28.0)	141 (5.7)	

*マニュアルについては、質問項目 7 および 8 のみ

さらに, 質問 6「うつ伏せになった子どもをすぐに仰向けに直している」も「とてもあてはまる」が 48. 4% (1214 名) であった。同じ睡眠中に関する質問 5「午睡中の呼吸チェックを行なっている」は 78. 9%(1994 名)が「とてもあてはまる」としているにも関わらず, 「うつ伏せになった子どもをすぐに仰向けに直す」ことについては「呼吸チェック」に比べると消極的であることがわかった。

D. 考察

今回は単純集計にとどまっていることから, 低年齢児の保育に当たっている保育者の安全に対する状況を複合的に分析することができていない。

しかし, この単純集計を持っても, 低年齢児の保育における安全に関する課題が見えてくる。

たとえば, 質問 12「睡眠中, プール活動・水遊び中, 食事中等の場面で重大事故が発生

しやすいことを知っている」に関しては90.1% (2277名) が「とてもあてはまる／あてはまる」と答えており、それらの場面の危険については熟知していると考えられる。ところが、睡眠中に「うつ伏せになった子どもをすぐに仰向けに直す」ことが「とてもあてはまる」園は、全体の半数以下に止まっている。「あまりあてはまらない／全くあてはまらない」保育者も6.9% (175名) おり、睡眠中の死亡事故が多い低年齢児保育の保育において、特に大きな課題であると考えられる。

うつ伏せになった子どもをすぐに仰向けにできないのは、保育者の問題なのか、それとも構造的な問題（保育者の配置数など）なのだろうか。こちらは各施設への個別のインタビュー調査などにより、その背景を明らかにする必要があるだろう。

E. 結論

今回の調査により、低年齢児の保育にあっている保育者は「睡眠中、プール遊び、水遊び、食事中等の場面で重大事故が発生しやすいことがことを知っている」割合が非常に高いことがわかった。『保育所保育指針』『幼保連携型認定こども園教育保育要領』第3章健康及び安全に示された「事故予防」に関する項目が保育者の間に浸透していることがうかがえ、事故予防に対する意識も高まっていると考えられる。

しかし、睡眠中の状況については依然として課題があり、児童虐待への対応や、アレルギーの理解や対応に関しても十分とはいいがたいことがわかった。

今後はこの結果の背景にある要因等についてもさらに検討を行い、低年齢児の保育の安全と質の向上について明らかにしていきたい。

F. 引用文献

こども家庭庁(2024a) 保育所等関連状況取りまとめ
こども家庭庁(2024b) 「令和5年教育・保

育施設等における事故報告集計」の公表について

三菱UFJリサーチ&コンサルティング株式会社(2024)『保育所等における低年齢児の保育の保育内容及び実践・運営状況に関する調査研究報告書』

G. 研究発表

1. 論文発表

なし(検討中)

2. 学会発表

猪熊弘子・箕輪潤子・淀川裕美・菅井洋子(2025)「低年齢児保育に関する保育者の認識(2) ―安全に着目して―」日本保育学会第78回大会 ※R6年度末時点で発表予定

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし